

---

# 恋ノ思イ出

狐狸川ゆうら

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

恋ノ思イ出

### 【Nコード】

N2499C

### 【作者名】

狐狸川ゆづら

### 【あらすじ】

結婚二年目の沙穂は、久しぶりに昔の友達との飲み会に参加した。その中には沙穂が結婚前に好きだった人もいて…。

結婚して二年目、初めての飲み会。この日をとても楽しみにしていた。

だって昔の友達と久しぶりに会えるし、それに…あの人も来るから。

結婚前、私にはとっても好きな人が居た。一緒に居ると楽しくて、とってもドキドキして苦しかった。

でも、告白は出来なかった。

だって彼には好きな人が居るって知ってたから。その人が、自分じゃないって知ってたから。だから二人の関係を壊したくなかった。皆と一緒に笑って、遊んで、それで良いと思ったから。

実ノラナカッタ恋ホド美シイ。

それでも、忘れられない出来事がある。

私の宝物、旦那には言えない私だけの小さな秘密。

一度だけ、たった一度だけ…彼が私の手を握ってくれた。心臓が止まりそうな程とってもドキドキして、恥ずかしくて、嬉しくて、下を向いた。

その時、何で彼が私の手を握ってくれたのかは知らない。でも、今でもそのときの事を思い出すとドキドキする。

貴方ハ、ドウシテ私ノ手ヲ握ツタノ？

「久しぶりー！！きゃー皆変わんないねー！」

「お、来た来た」

「新妻・沙穂のお出ましたよー」

「やだなー！理恵ちゃんこそ、神田くんと来月結婚じゃない！未来

の旦那様はどうしたの？」

「いいのよ、ウチは！腐れ縁みたいなモンなんだからっ。そっちこそどうなのよ？旦那とはまだラブラブなんでしょー？羨ましいな、このー！」

「へっへー。当然じゃない！ンもう毎日ハッピーよう！」

「ヤダヤダ、久しぶりに顔出したと思ったら、早速お惚気かよ！全く、寂しいボクちゃんたちの身にもなってくれよなー？な、正也せいぜ！」

一瞬、目が合う。意識しないようにすればする程、なんだか不自然。あんまり変わってないんだ…。

「全くだねえ…。いっそ、俺たちラブラブになっちゃおう？」

「イヤン！正也のエッチ！」

「バカねーアンタたち！だから女が出来ないのよ！」

皆が声を立てて笑う。こんなので、久しぶり。なんだか昔に戻ったみたいで凄くワクワクする。

私たちは皆、年齢も仕事もバラバラ。知り合いの飲み会とかイベントとかに顔を出すうちに、自然とこの五人で仲良くなった。

来月結婚する理恵ちゃん二十六歳、彼女はデパートで化粧品の販売員をしている。だからいつもバツチリと流行のメイクを決めて、お洒落にも気を使っていつもカッコイイ。

神田くん二十九歳は理恵ちゃんと七年間付き合った彼氏だ。今は外資系の会社で働いてるって言うてたなあ。とっても無口で、理恵ちゃんとは対照的。でも歳は私と同じだから、割と私とは話が合う。江田くん二十六歳、デパートでの紳士服販売員。いつもふざけて、理恵ちゃんを怒らせて遊んでいる節がある。見てくれはそれなりになのに、性格がもの凄い三枚目。お笑いが無い人生なんて考えられないって口癖、まだ変って無いみたい。

そして…田辺たなべ正也二十四歳フリーター。性格はどちらかっていうと、江田くんみたいで、二人は良くつるんでるらしい。ちよつと、何を考えているか分からない不思議系な所があるけど、黙ってれば本当にカッコイイと思う。

彼が：私の好きだった人。

「何処行く？」

「まずは居酒屋！！次、カラオケ、そんなもって、ボウリングー！！」

「いいねー！」

「行こう行こう！」

「よっしゃー！しゅっぱーつー！！」

昔みたい、いっぱい飲んでたつくさん笑って、騒いで、楽しくて楽しくて。

そんな時、携帯が鳴った。

旦那からのメール。『何時に帰るの？駅まで迎えに行くので、連絡下さい。気をつけてね』遊びに来た私に、昔の好きな人に会えて浮かれている私に、優しい気遣いの言葉。

なんだか、凄い罪悪感。

悪い事なんかして無いのに、とつても後ろめたい。チラリと時計を見やると、時計の針は午後十一時を指そうとしていた。

「あ…。ごめん！そろそろ私、帰らなきゃ！」

私は皆に謝って、理恵ちゃんにお金を渡すと急いでカラオケを後にした。昔、散々酔っ払って歩いた駅までの道。景色はやっぱりあんまり変わってなかった。

「ちよつと、飲みすぎたかな？」

旦那に今から帰る旨をメールする。

でも、なんだか、足元がふらついて手元もなかなか怪しい。

「およよよ…」

今まで気付かなかったけど、自分でも可笑しくなるくらいの酔っ払いだ。実に真っ直ぐ歩いちゃいない。しまったなあ：ハイヒールなんか久しぶりに履いたもんだから、余計に安定しないし、足も痛くなってきたやつた。

こりゃイケナイ。

メールの内容を、'帰るね'から'迎えに来て'に変更しなきゃ。

集中してメールをうつため、近くにあった自動販売機に寄りかかる。  
「自販機って、明るくていいなあ」

何でも無いことだけど、街頭の明かりよりもっと明るいから、意味もなくちよつと嬉しい。

「ナニ、言ってるの？」

「んん？」

誰も居ないと思って言った独り言に、思わぬ反応があつてビックリ。しかも、この声は…。

「はい、ちよつと右にずれて。ボタン押せないから」

「あ、ごめん」

正也くん、だあ…。

「って、ど…どうしたの？み、みんなは居るの？」  
辺りを見回す。

「居ないよ。…俺、用事があるから」

彼も自販機に寄りかかりながら、プシュツとブルトツプの軽い音を立てた。その彼の答えに、なんだか良く分からないけど、ちよつとホツとする。

人通りの途絶えた商店街は思いの外静かだ。この時間じゃ猫だつて大人しくしているに違いない。

深夜、二人きりの時間だなんて…ちよつとドキドキする。

「なんだあ。相変わらず忙しいんだねえ。ねえそうだ！とうとう、念願かなつて芳香<sup>よしか</sup>ちゃん<sup>よしか</sup>と付き合ってるんだって？うらやましいねえ、この！芳香ちゃん美人だし、頭良いし、気立てもいいし、もう非の打ち所が無いってヤツ？ライバル多いから、振られないようにしつかり捕まえなきゃだめだよー」

「……そだね」

缶に口を付けながら、真つ直ぐ正面を見据えて彼は齒切れ悪く答えた。

「…どしたの？何かあつた？」

「別に」

沈黙。

二人とも隣同士で立ちながら無言になる。なんだかとても居心地の悪い雰囲気。私、何か悪い事いったかな？どうしよう？

「あ……」

「あのさ。…なんで、沙穂は結婚したの？」

言葉の出だしが被った。私は言葉を呑み、正也くんは言い切った。

「なにー？どしたの、突然」

「気になったから」

正也くんは相変わらず正面を向いたまま、無表情で缶の中身を飲んでる。

「んんー…。なんでって改めて聞かれると、ちよつと困っちゃうなあ。年齢的なものがない訳じゃないケドね。でもね、単に好きって言うよりも、なんて言うのかな…んー。ああ、この人と結婚したら楽しいだろうなって、思ったから、かな」

「ふーん……」

正也くんは詰まらなそうに缶を傾けた。

「あー、もう！人がせつかく真剣に答えたのに！なによー！」

ちよつと真面目に答えただけに恥ずかしい。

携帯のストラップを握って、頬を膨らませるように口を尖らす。

そのまま、相手の顔を覗き込んでやる。

「正也くんのイジワル！」

「バーカ」

一瞬、目が合った。

「きゃっ……！」

正也くんが突然、私の体を力任せに引き寄せた。その反動で思わず手に持っていた携帯が、硬いコンクリートの上に落ちていく。あまりにも突然の出来事で驚いた私は、思わず傍を離れようと体を振った。

「好きだ……」

頭の中が真っ白になる。

「うそ…」

「本当。ずっと、ずっと、ずっと、ずっと…好きだったんだ」  
私の肩を抱き寄せた、正也くんは腕に力がこもる。

「だって、前に芳香ちゃんが好きだって…」

「ホントのことなんて、皆の前で言えるかよ」

ヤメテ。

「なんで結婚なんかしたんだよ」

ヤメテ。

「だって、だって、旦那さんのコト好きだし、プロポーズ…」

「俺のこと、嫌いか？」

ナンデ、ソシナ事ヲ言ウノ？

「違う！嫌いとか、そんなんじゃない…」

「じゃ…好き？」

正也くんはいつに無いほど真剣な目をしていて。

「…ねえどうしたの？冗談やめてよ」

笑って誤魔化そうとしたけど、正也くんは相手にしてくれなかつた。

「好き？」

好キダヨ。

でもソレは言っではいけない言葉。

アナタノコトガ、好キデス。

絶対に、死んでも、口にしちゃいけない言葉。

「止めて。痛いよ、痛い…」

涙がポロポロ零れ出す。

「あ…」

正也くんは力なくそう言うと、私の体から手を離す。とっさに私は携帯を拾うと急いでその場を離れようとした。

でも…。

「…なんで、今更そんなコト言うの？私の気持ち、全然考えてくれてナイ」

だからと言って、結婚前に言われたとしても、それでも、きつと私たちの結果は変わらない。

「バイバイ」

私は足の痛みも忘れて走ってその場を離れた。

胸がズキズキ痛んで、咽の奥が締め付けられるように痛かった。

バランスが不安定なハイヒール。

「あ！」

私はまるで漫画のヒロインのように盛大に転んだ。

そのせいなのか、ヒールが片方ポツキリと折れていた。なんだか

今の私の気持ちそのものみたい。

泣きたい気持ちで一杯だ。嗚咽が舌の根のところまで上がってきている。

「何なのよ、もう！」

そんな私の気持ちを察してか、携帯の着メロが鳴り出す。

発信者は旦那。

「はい…」

「今、どの辺り？もう直ぐ駅に着くよ」

「まだ、商店街」

「どうしたの？何かあった？」

この人はいつも勘がいい。

「ん、ちょっとね。転んだの。ヒールが折れちゃった…」

「大丈夫？怪我は無い？」

暖かな声、優しい言葉。どんどん緊張が解けてくる。

「…イタイ。足が、痛いよ…足がいたいよう」

心も痛いよ。

「だ…大丈夫？いま、すぐ行くから。立てる？何か目印ある？」

「わかんない、なんにも、わかんない…うえええん」

旦那はいつも私に優しい。

結婚で、好きだとかドキドキだけでするもんじゃないって、この人が教えてくれた。温かくて、大切に、卵みたいに壊れやすい。

「大丈夫、直ぐ行くから、ね？」

「うん、うん…ひっく、えっ」

実ノラナカッタ恋ホド美シイ。

そう、それでいい。

さようなら、正也くんを好きだった私。

(後書き)

十代の頃の純粹に恋愛、というより、大人になった少し斜めな恋愛です。(だと思えます)

読んでくださった方、ありがとうございました！

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2499c/>

---

恋ノ思イ出

2009年3月24日09時45分発行